

## トランプ大統領の就任1年の評価

2017年12月26日

りそな銀行 アセットマネジメント部  
チーフ・マーケット・ストラテジスト 黒瀬浩一

トランプが米国大統領に就任して約1年が経過した。筆者は特に経済面でのトランプ大統領の登場をレーガンの再来として高く評価したが、毀誉褒貶の著しい1年となった。一般論として、政権の支持率と株価は比例する。しかし、トランプは、政権支持率は急落後に底這いとなる一方、株価は1年を通してほぼ一本調子で上昇した。経済と株価から見れば「終わり良ければすべて良し」と言えなくはない。

確かに経済面では多くの実績をあげた。景気は最良の状態にあり、多くの経済指標が史上最高水準にある。産業界との関係をABOと呼ばれるオバマ時代のアンチ・ビジネスからプロ・ビジネスに転換させ、1つの規制を新設すれば2つ廃止するルールを打ち出して規制緩和を進めた。その効果は10兆円にもなると推計されている。10年間で1.5兆ドルと史上最高額の減税を含む税制改正も成立させた。

外交面では、力による平和を打ち出し、国際秩序の回復をもたらした。なぜかあまり報道されないが、欧州に極右の台頭をもたらした難民の根本原因だったISに勝利したのは歴史的な快挙と言える。北朝鮮とイランは、問題解決ではなく、事実上の封じ込めに逆戻りした。敵を明確にしたことで味方も明確になった。今年の日やサウジアラビアは、巨額の対米貿易黒字を持つ敵から味方に入れ変わった。

社会の分断は進んだ。ここが最も強く批判されるポイントだろう。ただ良く言えば、外交面で打ち出した「力による平和」と類似の「力による秩序」を推進しているように見える。最高裁判事の人事では保守派を据えた。この後何人の保守派の判事を指名できるか、に草の根の共和党員は最も期待をかけているようだ。経済的にはプロ・ビジネスとはいえ、「米国の恥」とまで表現したオピオイド問題を白日の下に晒した。トランプの平易な言葉で直接語り掛けるスタイルにより、米国の小学生高学年なら感覚としてトランプの政治を理解していると言われている。「Drain the Swamp」はかなり前進したと言える。

政権運営は紆余曲折を経て豹変した。当初は大統領選挙の論功行賞人事から始まったが、リークや抗争で混乱したことから主席補佐官に軍出身のケリーを据え一応の落ち着きをみた。その後の政権運営は、暫定予算、債務上限、税制改正など比較的スムーズに進んだ。政権運営の基本スタンスは、一言で言うなら米軍が得意とする戦略「shock&awe」と見て良いのではないか。ケリー主席補佐官やマクマスター安全保障担当補佐官が軍人時代にイラク戦争やコソボ紛争など文字通り実戦を通じて体得した戦略だ。

トランプが標榜する「米国第一」と「力による平和」は、一見矛盾する。しかし、両立することも可能だ。特に2018年は11月に中間選挙が控えている。「力による平和」をテコにして経済面で「米国第一」の実利を得る「取引」を進めると見るのが自然だろう。まずは1月に始まるNAFTA再交渉で「shock&awe」を実践するかどうかに注目すべきだろう。

トランプ政権誕生の世界史的な意義は、グローバル化、民主主義、国家主権を同時には達成できないとされるグローバスのトリレンマをどう解決するかにある。トランプ政権の評価は、国内外の政治と経済を幅広く包含する観点で見る必要がある。

以上

- ・本資料は、お客様への情報提供を目的としたものであり、特定のお取引の勧誘を目的としたものではありません。
- ・本資料は、作成時点において信頼できるとされる各種データ等に基づいて作成されていますが、弊社はその正確性または完全性を保証するものではありません。
- ・また、本資料に記載された情報、意見および予想等は、弊社が本資料を作成した時点の判断を反映しており、今後の金融情勢、社会情勢等の変化により、予告なしに内容が変更されることがありますのであらかじめご了承ください。
- ・本資料に関わる一切の権利はりそな銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを固くお断りします。